灰紋（はいもん）

アリィアが赤ん坊を抱いている。赤ん坊は巻き毛の後頭部をこちらに見せていたが、アートゥナが部屋に入ると振り返った。口に指を三本入れて、よだれで顔をべとべとにしている。

「あら、来たわ」

アートゥナに気づいたアリィアは言った。彼女はしばらく赤ん坊をあやしていたが、薬の人が近寄って腕を差し出すと、その子を預けた。

「〈天守り（グロナーシュ）〉をマノから引き出すって？」

アートゥナは、廊下へ出たアリィアについていきながら訊ねた。「もう平気なの？　その……アリィアが〈天守り（グロナーシュ）〉と会っても」

「それは、影の人のみがご存じよ」

アートゥナは肩をすくめた。「それは嬉しいね」

二時間前まで、アートゥナは、魔導師の木の自室で寝ていた。しかしこれは、アリィアには話せない。朝から昼まで、ご飯も食べずぐーすか寝ていたなんて、ちゃんと魔導師をしているアリィアに言えるわけがない。

無論、アートゥナだって仕事をしていた。つながりの扉を調べたりだとか、調べたりだとか、調べたりだとかだ。何日も続けて捜索しているが、番人は見つかっていない。

燃え尽きかけていたところに、アリィアの使い魔シャーナによるお呼び出し、かつ、目覚ましがあった。〈天守り（グロナーシュ）〉をマノから引き出すから、手伝いに来い、と。

アートゥナは、寝起きの腫れぼったい顔をこすってごまかし、寝ぐせが跳ねる赤毛を適当に結ぶや、エラドルスに乗って療養所までやって来たのだった。今回もエラドルスは馬小屋に預けた。誰かの前で魔法を見せるなんてごめんだし、指輪変化魔法がまた成功するとも限らなかったからだ。

アートゥナは、早歩きでアリィアを追いかけた。

「じゃあ、ノゥアとの仕事交代は終わったってこと？」

「ええ、まあ。……こっちよ」

アリィアは角を曲がると、隣の棟への渡り廊下へ出た。気温はぐんと高く、強い日差しに目を細める。

（本当は、もう少しやれるはずだったのに）

アリィアは苦い思いだった。〈天守り（グロナーシュ）〉と距離を置くためにノゥアと仕事交代をしたが、アリィアにできたのは、アスハリエティク国へ灯火蝉（ナックィカ）発注の手紙を送ったことと、〈見えない死〉の新たな被災地を訪れたことだけだった。北熊（ノール）学舎で〈見えない死〉が起こったという知らせを受けたときは、さらに焦りを感じた。事態は確実に深刻化している。今までにないほど、アリィアは、エイネーの状況に危機を感じていた。

「ねえ、ノゥアを見た？　私、最近家に帰っていないから、様子が分からなくて」

アリィアは、アートゥナに訊ねた。ここら十日間ほど、〈天守り（グロナーシュ）〉を移動させる方法と、尽きることのない魔法動物退治に追われていたせいで、宿で寝泊まりをしていたのだ。

「いや、全然。ていうか、ここで〈天守り（グロナーシュ）〉の治療をするって出かけてから、

ノゥアは一度も帰ってきてないよ」
アリィアは、ぎょっとした。
「それって、一か月も前の話じゃないの」
「そうだよ」
仕事を戻すことを一週間前にストロキントからの手紙で知ったアリィアは、まさかノゥアが家に帰っていなかったとは思ってもいなかった。何か大きな仕事でも入ったのだろうか。
「でさ、〈天守り(グロナーシュ)〉をマノから引き出すって言ったけど、どこに引き出すわけ？空？」別棟に入ると、アートゥナは訊ねた。
「空には〈喰う者〉がいるわ。空を食べていた透明なやつを、そう呼ぶことにしたの。〈喰う者〉のせいで〈天守り(グロナーシュ)〉は帰れなくなっているから、空間編み魔法を使って地上に避難場所をつくろうと思って。これがかなりの時間と魔力を消費するのよ……。一人だとあっというまに潰れた蛙になる。だから、あなたに来てもらったわけ」アリィアは、右手に曲がった。
「……それ、どれくらいかかる？」
「ざっと一か月」
拍子抜けしたアートゥナは、開いた口が塞がらなかった。
「単純な仕事じゃないのよ。でも、急がないと。完成するまでは、マノの中に〈天守り(グロナーシュ)〉がいる状態になる」
アリィアは、〈天守り(グロナーシュ)〉がマノから一時的に離れているのは、目的を果たしたからだろうと言った。〈天守り(グロナーシュ)〉は、マノを通して〈喰う者〉のことを伝えたかった、しかし、やはり帰るところがなく、仕方なしにマノの〈黄身(シラ)〉に居座っ

ているのだ、と。

「以前のように暴れることはなくなったと聞いたけれど、〈天守り（グロナーシュ）〉ほどの魔力を持った魔法動物を長い間〈黄身（シラ）〉に居座らせることは、相当な負担になる。〈天守り（グロナーシュ）〉がいる限り、マノの〈黄身（シラ）〉は蝕まれていくわ。手遅れになる前に、避難場所を完成させないと」アリィアの表情は、険しかった。

魔導師二人は、別棟一階の、隅の部屋にたどり着いた。

かつては物置だったのか、使われなくなった机や寝台、椅子が、脇に山と積まれている。空気はかび臭く、埃っぽい。窓には緞帳が引かれていて、外の光を遮断していた。

だが、完全な闇ではなかった。部屋の中央に、ぼんやりと水色に光る球体があるのだ。アートゥナの背丈と同じくらいで、球体の下には、実言葉（アウシェヌムン）による魔法陣が何重にもなって書かれていた。魔法陣は部屋の端までに及び、まるで水紋のようだ。

「薬の人に頼んで、この部屋を用意してもらったの。この球体が避難場所よ。内部に空間を作って、天空と同じ環境にする。ここまでくるのに十日はかかったわ」

「これ、どこまで大きくするの？」アートゥナは、光る球体に近づいた。

「村一つ分あるといいわね。広ければ広いほど、〈天守り（グロナーシュ）〉は精神的負担を感じないで済むでしょ。今はまだ、球体内は寝台一つ分の広さもないわ。十日のほとんどを魔法陣に費やしたから」

アートゥナは、自分と同じくらいの球体を、信じられない思いで見つめた。

「入ってみる？　低酸素で窒息するけれど」アリィアは眉を上げた。

「もう少し年を取ったら考えてみる」

「なるほど、名案ね」
アリィアは、さっそく、アートゥナに空間編み魔法を教えた。
「肩幅に足を広げて立って。そして、どれくらいの空間を作りたいか想像する、はっきりとよ。術の唱えはじめは、小さめのを想像して。それから、だんだんと大きくしていくの、風船を膨らませるみたいにね。一気にやると失敗するわ。途中で投げ出したり、別のことを想像したりしてはだめ。空間が途切れたり、圧縮して密度が濃くなったりするから。均一な空間を作るコツは、想像力と集中力」
アートゥナは、なんて自分に不向きな魔法だろうと思った。魔力を使うことにも、いささか抵抗を感じる。だが、一人のアベドの命がかかっているのだ。やらないわけにはいかない。
アートゥナは、たっぷり時間をかけて、空間編み魔法を練習をした。アリィアの教え方は的確で、淡々としていた。
午前中には、自分の頭くらいの空間を作れるようになった。休憩をとり、午後は〈天守り（グロナーシュ）〉の空間を広くする作業に取りかかった。二人の魔導師は、互いに球を挟むようにして立ち、交代で空間を広げた。それは、日が暮れるまで続けられた。
「今日はこれくらいにしましょ」
アリィアが言った時、すでにアートゥナは床に伸びていた。最後のしめはアリィアが行ったが、アートゥナは先に力尽きていた。頭はぼうっとするし、体は火のように熱くなっている。
彼女は、よろよろと半身を起こした。球体の大きさは、入って来た時と変わっていなかった。
「これでどれくらいになったの？」

「確かめてみる」
アリィアは床に座り、目を閉じた。〈飛び込み〉をやろうとしてるのが分かって、アートゥナは困惑した。
「この球体に〈飛び込み〉するわけ？」
「アートゥナ、〈飛び込み〉は、どんな環境、どんな物体の〈黄身（シラ）〉にも入れるのよ。低酸素の球体内でも、〈飛び込み〉なら入れるわけ。……〈黄身（シラ）〉は情報の塊、広さも質量も……分かる……。……ごめん、集中させて」アリィアは、煩わしそうに首を振った。
アートゥナは仰向けのまま「はいはい、そうですか」と呟いた。アリィアはしばらくの間、がっくり頭を垂れていた。アートゥナは、彼女が帰ってくるのを静かに待った。
少しして、髪の長い魔導師は目を開けた。
「すごいわ！　たった半日で、寝台一つ分が居間になってた。やっぱり、魔導師の数は多いほうがいいわね」
「……居間」
アートゥナは、どっと疲れを感じた。アリィアは、〈天守り（グロナーシュ）〉に必要な大きさは、村一つ分と言った。それを考えると、果てしなく思えた。
「大丈夫よ。続ければ、いつかは終わる」アリィアは、赤毛の魔導師に手を伸ばし、起き上がらせた。
帰る前にマノの様子を覗いていこうと、アリィアは言った。

マノは、部屋で夕飯を食べていた。彼女の隣には、以前にも会った、マノの世話役、シャーレイが座っている。相変わらず痩せぎすで、顔色が良くなかったが、マノの方は、食欲旺盛なリスのように、もくもくと食べ物を口に運んでいた。小さな丸い手で一生懸命ルク（先の割れた匙）を使っているが、本当はたくさん食べられる手を使いたいことが、勢いから伝わってくる。

アートゥナは、起きているマノをはじめて見た。緩やかにうねる金色の髪が、ハールン牛の塩焼きをかみ切ろうと皿にかがむたび、顔にかかる。床に届かない足や、ルクでつたなく食事する姿は、マノがまだほんの子どもであることを再認識させられた。

魔導師に気づいたマノは、口を動かしたまま顔を上げた。シャーレイが立ち上がり、礼を示す。「こんばんは。魔導師アリィア様、アートゥナ様」

魔導師二人は、頷くことで応えた。マノは茶色い大きな瞳で、魔導師たちを見上げた。口の端に肉の油がついている。

「こんにちは、マノ。具合はどう？」アリィアは屈みこんで訊ねた。

「うん、だいじょーぶ」

マノは、嬉しそうにこくりと頷いた。目は、ちらちらとアートゥナを伺う。

「はじめましてだったわね。こちらは、私と同じ、魔導師のアートゥナよ。この前話した、私と一緒に〈天守り（グロナーシュ）〉を調べたアベドよ」アリィアは、気づいて言った。

マノは、尊敬と期待と物珍しさを浮かべた目を、アートゥナに向けた。

アートゥナは、ぎこちなく笑みを浮かべた。「魔導師アートゥナよ。よろしく」

「あたし、マノよ。アートゥナ様……、アートゥナ様は、髪が火みたいね！」

マノは興奮で鼻を鳴らした。アートゥナは、思わず笑った。「まあね」

「こらっ。魔導師様の前では、きちんとした言葉でお話しする約束でしょう。

背も伸ばして」
シャーレイは、魔導師様の髪の毛になんて話を振ってはいけないと慌てて、マノの体の向きを椅子ごと変えた。マノは魔導師たちと向き合った。アートゥナは口を閉じた。
「昨日の夜は、よく眠れたかしら？」気を取り直して、アリィアが訊ねた。
「わかんない。……あ、えっと、わからないです」
マノは、足をぶらぶらさせた。手が落ち着かなげに座面をこする。
「肩が痛いけど、だんだん痛くないです。あと、いい夢も見ました。ガンちゃんには会ってないけど、あのね、お歌が聞こえたんです。すごく綺麗なお歌で、山から聞こえるの。たくさんの生き物が、お歌に向かって集まるの……」
マノは思い出すように、目を左上に向けて話した。
「途中で目覚めることも少なくなりました。よく眠れているんだと思います」
シャーレイが横から補足した。
「よかったわね。食欲も問題なさそうだし、このまま様子を見ましょう」
アリィアが言うと、マノは慌てて手を叩いた。
「あのね、あのね、アリィア様。ノゥア様と約束したんです。三日間覚えていたら、ガンちゃんに会ってもいいっていうやつ……」
マノは、ノゥアと交わした約束の話をした。
「なるほど。この状態だったら、市（いち）に行っても大丈夫だと思うわ」アリィアは頷いた。
マノは、両足をばたつかせた。
「ほんと！　今日行っても、いいですか？　明日と、明日の明日も？」
「まずは、一日だけ出てみましょう。それから、ゆっくり慣らしていくように」
アリィアは、シャーエレも交えて伝えた。「疲れると、〈黄身（シラ）〉も弱って、また

〈天守り(グロナーシュ)〉とあなたが混ざってしまうかもしれないから」

「大丈夫、怖くないよ！　前に〈天守り(グロナーシュ)〉を見たから。あの子、怪我をしてるの」マノは、凛々しい眉を真剣にひそめ、頷いた。

「そうね。気持ちもそれくらい強く持っていれば、〈天守り(グロナーシュ)〉と混ざることもないわ。あなたはとても頑張っているわよ、マノ。もう少しの辛抱だからね」

マノは、口をしっかり結んで、頷いた。その勇ましさの影に、小さな不安が飛んでいるのを、アートゥナは見つけた。言葉にはしてないが、〈天守り(グロナーシュ)〉が〈黄身(シラ)〉にいることに恐れを抱いてるのは確実だ。アートゥナの体は、空間魔法で酷使したせいで重い疲労感に包まれていたが、体が自分のものではなくなる恐怖と戦うマノよりも、断然楽なのかもしれない、と思った。

「それもこれも、魔導師様のおかげです。ありがたい、ありがたい」

シャーレイがマノの金髪を撫で、深く礼をのべていると、入口のなにかに気づき、視線を向けた。

見ると、黒髪の女の子が立っていた。マノより背が高いが、見習いよりは幼い。量のある黒髪は肩に垂れ、前髪の間から、激しい緑の瞳がのぞいている。青白い肌に、上向きの鼻。ぶかぶかの服からは細い腕が突き出ていて、手先へ向かって年輪のような模様があった。指先は模様で茶色く染まっている。体に対して、手はずいぶん大きく、ぶらぶらと重りを吊り下げているように見えた。

「何してんの？」

かすれ声で、少女はシャーレイに訊ねた。シャーレイは答えなかった。「口についているわよ、マノ」と、布を差し出す。

「夜ごはん！　森猫(もりねこ)ちゃんも、食べる？」

食事を再開したマノは、ルクに突き刺した肉の欠片を掲げた。森猫と呼ばれた少女は、足音なくマノに近づいた。
「あなたはもう食べたはずでしょう？　自室に戻りなさい」
シャーレイは手を振った。それで森猫は立ち止まり、魔導師を見上げて、「こんばんは」とあいさつした。
「こんばんは、森猫」アリィアは答えた。
「森猫、時間があるなら、パナフゥラ所長を呼んできて。魔導師様たちがお帰りになるから」
「お気遣いありがとうございます、シャーレイ。でもお忙しいと思いますので、私たちはここで失礼します」
アリィアが言うと、シャーレイは慌てて、「それでは、森猫が玄関までお送りいたします」と、目で森猫に指示した。
森猫は、ついてくるよう、敬意を示して魔導師たちに頷いた。
玄関に向かう途中、アートゥナは、森猫の肌を見た。顔や腕に、掻き壊した跡がある。
アリィアが森猫に訊ねる。「あなたは、ここで苦労はしてない？」
「いいえ、アリィア様。あたしは、よくしてもらっています。薬の人からの薬も、ちゃんともらってます」
「……そう。それならよかったわ」
森猫は、玄関に魔導師たちを案内すると、二人が立ち去るまで見送った。
療養所の明かりが、たたずむ少女の姿を影にした。
敷地の木々の向こうに森猫の姿が消えると、アートゥナはアリィアを見上げた。
「彼女は、灰紋（はいもん）よ」

アリィアが静かに言い、アートゥナは、さっきの森猫のやり取りを、やっと理解した。

灰紋は、時折生まれる、魔力を微量ながらに持つアベドのことだ。まとまりのない黒髪と、鮮やかな緑の目、体と不釣り合いな大きな手を特徴とし、腕には年輪のような模様が広がっている。

なぜ彼らがそのような容姿なのか、詳しい事は分かっていない。恐らく、その不安定な魔力のせいであろうと言われているが、本当の理由は解明されていなかった。

彼らの魔力は、微量であるがゆえ、光の民（シスルア）や魔導師と違い、自分で制御ができないものだった。灰紋の魔法は、主に感情の起伏によって爆発的に発動する。怒りやすく、衝動的な性格が多い灰紋は、しばしば、魔法で周りのものを傷つけた。そのせいで、無魔力者から避けられたり、不当な扱いを受けることがあった。彼らから見れば、灰紋は危険で手に負えない厄介者だった。

最近では、そんな魔力の暴走を、投薬によって改善しようという動きが出ている。しかし、薬自体が高価であったり、灰紋の権利を守る〈陽光雫（オーリウシィム）〉という団体からは、灰紋の個性を殺すことになる、という声も上がっていた。〈陽光雫（オーリウシィム）〉は、灰紋と世間の溝を、もっと互いが歩み寄る形で実現することを望んでいた。

しかし、その溝は埋まるどころか、深まるばかりだ。その根源的な理由は、〈目覚めの戦い〉まで遡る。

エイネー史上最も悲惨な戦争と言われる〈目覚めの戦い〉は、光の民（シスルア）と一部の魔導師が敵対して起こったが、国民も二つに別れてしまった。光の民（シスルア）軍か、魔導師率いる反乱軍か、と。

微量ながらも魔力を持っていた灰紋は、魔導師たちにその能力を買われたり、自ら望んだりして、反乱軍についた。当時は差別も激しく、常に虐げられてきた灰紋にとっては、希望に光る選択だったのだ。アベドとして扱われない世界から脱するために、彼らは怒りの雷を、もっと力のある魔導師に託したのだった。

しかし、〈目覚めの戦い〉は光の民軍（シスルア）が勝利を収めた。反乱軍を率いた魔導師たちは、エイネーの極刑〈影送り〉により、影の地へ送られ、処刑された。〈影送り〉は、影の人が許しを与えるまで、食事と睡眠が奪われたまま影の地を歩き続ける刑だ。そうして頭（かしら）を失った反乱軍の灰紋たちは、各自散っていき、再びもとの世界に戻った。

光の民軍（シスルア）の多くは、全灰紋を刑に処する、もしくは国外追放をするべきだと、灰紋の存在自体を反対したという。しかし、当時の女王カサレアは、その意見を認めなかった。無駄な流血と憎しみを増やさない、これがカサレアの決定だった。

よって灰紋は、エイネーでの居場所をまた得られたわけだが、生きる場所はより狭くなっていた。敵意の目が消えることのない中で、灰紋は、息を殺しながら暮らしていくことになった。

それから現在に至るまで、百八年の時が流れた。いまでは、戦に参加した灰紋は地に還り、生きている灰紋の多くは、戦争とまったく関係がなくなっている。しかし、灰紋の歴史を知らないアベドは、エイネーにいない。彼らが国を裏切ったことを、まだ根にもつアベドもいるし、今後、また裏切るのではないかと恐れてもいる。

アートゥナは知っていた。これは、互いの恐怖による見えない戦争なのだと。

そして、その終焉には、時間がかかるのだということも。

「あの子は、どこが悪いの？」

アートゥナは、肌を掻き壊していた森猫のことを思って、アリィアに訊ねた。

「分からないわ。私も全員を把握しているわけではないから。けど、全員に治療を受ける権利があるのよ。あの子は大丈夫だと言ったけど、影で何が起きてるか、分からないわよね」

アートゥナは、シャーレイの言動を思い返した。梢のむこうに星が瞬いている。哂(わら)うように、謳うように。